

蒼井優 × ランクル、松浦弥太郎 × ポルシェ……

一人と一台のストーリー。

クルマのある生活。

BRUTUS[®]

Car Life



クルマといると、かわること、わかること。



自宅前に駐車された愛車。パリ市内でこうしたパーキングを見つけるのは至難の業だという。



太陽の出ている日はループを開けて暖かい日差しを楽しみながら運転するのが「トゥルーパス」。



愛車プレリウドの中には必ず『インターセクション マガジン』を忍ばせる。「007」でお馴染みのダニエル・クレイグが表紙を飾った号とこのヴィンテージカーのミックスが何とも言えないクラシック感を演出している。

Yorgo Klopas

2001年にフォトグラファーのランキン、そしてダン・ロスと共に『インターセクション マガジン』を立ち上げ、アートディレクターを務める。そのほかに、フランス版『GQ』のアートディレクションも務めるなど多方面で活躍中。

Honda Prelude

1978年にデビューしたクーペ型乗用車。高さの低いボンネットや緻密に計算されたプロポーションは当時「斬新なデザイン」と絶賛された。2001年に販売中止。82年に発売された2代目は、「デートカー」の名前でも親しまれている。



スローなドライブはメディテーションだ。

ヨルゴ・トゥルーパス ●アートディレクター、デザイナー
ホンダ プレリウド ●日本/1981年式

Paris

アッシオン、アート、音楽などクリエイティブな世界を「クルマ」という視点から映し出すハイセンスなカーマガジン「インターセクション マガジン」のクリエティブディレクターでもあるヨルゴ・トゥルーパスはパリ北部の自宅前でリトルシガーを片手に愛車を動かしつつ、「スポーツカーも含め、クルマというクルマは全て乗り切った」と言ってみせた。興味のあるクルマがあればメーカーから借りる。仕事柄どんなモンスターカーにも乗れるからこそ、この雑誌を立ち上げて以来、自らクルマを買うことはなかった。そんなグローバルな規模で成功しているカーマガジンの重鎮が8年ぶりに愛車として迎え入れたのは、ある日ネットでたまたま出会ってしまった1981年式の「ホンダプレリウド」。まさにトゥルーパスの一目惚れだった。「過去に購入したことのあるクルマも必ずホンダで、一度も浮気をしたことがないよ。味のあるダッシュボードが気に入ってる」スポーツカーを乗り回し、風を切っているような華やかなイメージのトゥルーパスには、およそ30年前に生まれたこの旧車が一目物足りなく映ってしまうかもしれない。ただこれが彼にとって最高の一台だという理由は、実はスローなドライブができるところにある。トゥルーパスの生活は目まぐるしいスケジュールに追われながら、毎日アツという間に幕を閉じる。ノンストップの彼にリラクゼーションを与えるのがこの一台。ヴィンテージカーでスピードが出せないから、普段は持つことのできない贅沢な時間を確保でき、短波放送だからこそトンネルに入った瞬間に車内が見事に無音になる。その時こそがトゥルーパス流「ドライビングメディテーション」をする絶好のチャンスだ。彼はこの時間を、仕事へのインスピレーションや今後の活動について一杯イマジネーションの羽を広げてみる。すると彼の心も和らぐのだ。「パリのカーライフはどう？」と訊くと「市内では運転しないよ」と彼は肩をすくめた。愛車を使うのは、郊外の母を訪ねる時だけ。「パリでクルマを運転するなんて、ただ自分をイライラさせるだけだよ」と首を振る。確かにパリの交通事情といえは、運転の荒いパリジェンヌやパリジャン、石のように動かない渋滞など悪名高い。そのような状況に対し、クルマのプロは「自転車」がパリ市内を行き来するベストホイールだと言う。「市内ならば自転車。クルマは遠出する時のみと区別をつけてね」だからこそトゥルーパスにとっては「ホンダプレリウド」とは究極の「フリーダム」を意味する。この一台は、彼の全てを解き放ってくれるメンターなのだ。

フ アッシオン、アート、音楽などクリエイティブな世界を「クルマ」という視点から映し出すハイセンスなカーマガジン「インターセクション マガジン」のクリエティブディレクターでもあるヨルゴ・トゥルーパスはパリ北部の自宅前でリトルシガーを片手に愛車を動かしつつ、「スポーツカーも含め、クルマというクルマは全て乗り切った」と言ってみせた。興味のあるクルマがあればメーカーから借りる。仕事柄どんなモンスターカーにも乗れるからこそ、この雑誌を立ち上げて以来、自らクルマを買うことはなかった。そんなグローバルな規模で成功しているカーマガジンの重鎮が8年ぶりに愛車として迎え入れたのは、ある日ネットでたまたま出会ってしまった1981年式の「ホンダプレリウド」。まさにトゥルーパスの一目惚れだった。「過去に購入したことのあるクルマも必ずホンダで、一度も浮気をしたことがないよ。味のあるダッシュボードが気に入ってる」スポーツカーを乗り回し、風を切っているような華やかなイメージのトゥルーパスには、およそ30年前に生まれたこの旧車が一目物足りなく映ってしまうかもしれない。ただこれが彼にとって最高の一台だという理由は、実はスローなドライブができるところにある。トゥルーパスの生活は目まぐるしいスケジュールに追われながら、毎日アツという間に幕を閉じる。ノンストップの彼にリラクゼーションを与えるのがこの一台。ヴィンテージカーでスピードが出せないから、普段は持つことのできない贅沢な時間を確保でき、短波放送だからこそトンネルに入った瞬間に車内が見事に無音になる。その時こそがトゥルーパス流「ドライビングメディテーション」をする絶好のチャンスだ。彼はこの時間を、仕事へのインスピレーションや今後の活動について一杯イマジネーションの羽を広げてみる。すると彼の心も和らぐのだ。「パリのカーライフはどう？」と訊くと「市内では運転しないよ」と彼は肩をすくめた。愛車を使うのは、郊外の母を訪ねる時だけ。「パリでクルマを運転するなんて、ただ自分をイライラさせるだけだよ」と首を振る。確かにパリの交通事情といえは、運転の荒いパリジェンヌやパリジャン、石のように動かない渋滞など悪名高い。そのような状況に対し、クルマのプロは「自転車」がパリ市内を行き来するベストホイールだと言う。「市内ならば自転車。クルマは遠出する時のみと区別をつけてね」だからこそトゥルーパスにとっては「ホンダプレリウド」とは究極の「フリーダム」を意味する。この一台は、彼の全てを解き放ってくれるメンターなのだ。



「プレリウド」に乗り込んだ瞬間から自分だけの世界に没頭。それがメディテーションの始まりだ。



「四角いフォルムが80sライクでなんともレトロ。同じく四角いテールランプもノスタルジックだろ」